

『パルメニデス』篇「移行部」(135b5-137c3)の研究

——後期プラトン哲学へのプレリユード——

栗原裕次

はじめに

プラトンはなぜ『パルメニデス』篇を書いたのか。対話篇の構造は単純にみえる。前半の第一部(127a-135b)でパルメニデスはソクラテスが提示するいわゆる中期イデア論を完膚なきまでに批判し、全体の四分の三の分量を占める第二部(137c-166c)では、同じパルメニデスが若いアリストテレスを相手に「一」を主題としてゼノン流の仮定法を実演してみせる、といったものである。こうした構造から、ある論者たちはプラトンが中期イデア論に訣別を告げ、そこから新しい哲学を歩み出す対話篇とみなしたりもした⁽¹⁾。この見方によると、『パルメニデス』は中期プラトンと後期プラトンの「分断」を象徴する作品となる⁽²⁾。

だが他方で、第一部と第二部の間に挟まれた「移行部」(135b-137c)に目を向けると、ここでは初期対話篇以来の関心事である善・美・美・正義の探究の重要性が強調され、イデアがその探究に不可欠である旨がはっきり表明されている。そして善・美・正義などのイデアの探究を本格的に展開する前に一種の「訓練」が必要であって、第二部はその訓練の実例と性格づけられているのである。移行部を素直に読めば、プラトンはイデア論を放棄したというより

は、訓練なしにイデア論に依拠して善・美・正義を探究する危険性を指摘しているように思われる(3)。しかしながら、「一」の「ある／ない」を仮定してその帰結を考察する第二部が、どういう仕方イデア論のための訓練となっているのかは必ずしも自明でない。

こう見てくると、プラトンは『パルメニデス』で中期イデア論に別れを告げたという解釈は安易にすぎるが、かと言って、第二部には善・美・正義のイデアがまったく登場せず、議論の直接の対象である「一」「多」「他」「同」「異」「限」「無限」等と価値的なイデアとの関係が不明である限り、中期イデア論が「訓練」を踏まえてどう堅持されているのかについても、確かなことは何も言えないのである。

こうした一筋縄では行かない『パルメニデス』に接近するために、本稿は一つの問題に絞って考察を加えることにする。それは、第二部で議論される「一」等の存在身分が何かという問題である。次節以降で見ると、第二部の探究対象はイデアだけなのか、感覚事物を含むのか、またイデアだとしても、中期のイデアと同じ存在身分なのか、といった議論の理解にとって極めて基本的な点について必ずしもコンセンサスが存在しないのである(4)。この点がはっきりしないなら、対話篇の執筆意図はおろか、第一部と第二部の結び付きを考える手掛かりすら掴めないままとなるだろう。

また、この研究はうまく行くと一連の後期対話篇を包括的に理解する糸口ともなりうる。『パルメニデス』第二部の探究対象が *idea, eidōs, yēnos* という語で表されるものを含むなら(5)、それらの用語が特徴的に後期対話篇のディアレクティケーや分割法の対象として頻出する限り、その存在身分の確定が方法の解釈に役立つからである。それゆえ、中期と後期とでプラトンの方法がどう変化しているのか、していないのかを考えるのにも貢献するだろう(6)。

かくして、本稿は『パルメニデス』の執筆意図、第一部と第二部の関係、中期から後期にいたるプラトン哲学の持

続と展開といった重大な問題を見据えつつも、具体的な考察はずっと手前のところで遂行する。第Ⅰ節では、「移行部」の内容を概観して、その箇所がどのような形で対話篇の前半と後半を結びつけているのかを確認する。第Ⅱ節では、移行部の中で第Ⅱ部の探究対象を特定する箇所の解釈を試みて、パルメニデスがソクラテスのアイデア理解をどう評価しているかを問う。第Ⅲ節では、第一部で提示されるアイデア論が高評価を受ける秘密を解明しながら、アイデアの存在身分を理解するための視角を手に入れる。こうした作業を通じて、『パルメニデス』が後期対話篇群にとって重要な出発点になっているとの見通しを得て、本稿の「むすび」としたい。

I 「移行部」の構成と問題点

まず、第一部と第二部を結びつける「移行部」の構成と内容を概観して、対話篇の進行に関わるその役割を確認したい。第一部の最後でなされる六番目の批判との連絡を見ることから始めよう(7)。

一 アイデア論の「二世界説」的アポリア

「最大」(134b4)のアポリアと評される第六批判(133a1-134e)は、アイデア世界と感覚世界の分断を極限にまで推し進めたものになっている。議論の出発点はアイデアの自体性にある。アイデアがそれ自体であるならば、「われわれの間で *τινι*」にはない。確かに、諸アイデアの中には関係性を本質とするものもあるが、その関係はあくまでアイデア同士の関係であり、アイデアがそれ自体である限り、「われわれのもとにある *τινι*」感覚事物との関係ではない。同様に、関係性を有する感覚事物も感覚できる個物相互間のみで関係する。例えば、〈主人〉のアイデアは〈奴隷〉のアイデアの

主人ではあるが、個物としての奴隷の主人ではなく、その主人となるのは個物としての主人なのである。

このことは、内的関係にある知識とその対象である真理にも当てはまる。〈知識〉のイデアの対象が〈真理〉のイデアであるのに対して、われわれのもとにある知識はわれわれのもとにある真理を対象とする。同様に、われわれのもとにないイデアも〈知識〉のイデアによつてのみ知られるため、〈知識〉のイデアをもちえないわれわれは〈美〉や〈善〉のイデアを含めて、どんなイデアも知ることはできないのだ。こうしてイデア不可知論が導かれる。

さらに恐ろしいことに、神の全知も神による人間支配も否定される。なぜなら、神は最も厳密なる〈知識〉のイデアを所有していても、その〈知識〉でわれわれのもとにあるものを決して知ることはできないし、神の〈支配〉もわれわれを支配できず、神々はわれわれの主人とはなりえないからである。こうした「驚くべき ἀσχυρότης」(134e7) 結論を導くイデア論は信ずるに値しないであろう。

このように第六批判は、自体性と関係性の一つの理解に依拠した「二世界説」の困難を明らかにしている(8)。この困難はこれまで以上に、イデアの存在への疑い、神ならぬ人間による定義や探究の不可能性を強調している(9)(134e8-135a7)。第一部で提示されたイデア論は「二世界説」に表象されるように、感覺事物の存在・生成・消滅をイデアによつて説明するという論だが、「移行部」への接続地点においては、イデア論に内在する困難の指摘は理論としての有効性への疑念を越えて、イデアの存在とイデアの認識・探究可能性への懐疑を生み出しているのだ。すると『パイドン』篇の仮設法に基づくイデア論——イデアの存在は証明なしの前提・仮設(100b)——を想起すれば、イデアの存在をそれ自体として主題化するという新しい歩みの開始を見て取ることができよう(10)。第一部の一連の批判は、イデアがあることの明証性から出発することを拒絶し、イデアがあるとはどういうことか、そもそもイデアとは何なのかを本格的に探究するきっかけとなりうるのである。

二 アイデアの存在理由と哲学の可能性

パルメニデスはアイデアの存在を学ぶにはすぐれた資質が必要であること、アイデアを自ら発見するだけでなく、十分な訓練を経た他者に教えるにはさらに驚くべき力を要することを述べた上で(135a7-b2)、アイデアの存在を認めるべき理由を語る。

T 1

「ソクラテス、もし実際少なくとも、人が今度、先ほどのすべての困難や他のそうした困難の方を見つめて、あるものどもの形相(σῆμα τῶν ὄντων)が存在することを認めず、それぞれ一つ一つの形相を何らか定義しようとしなければ、あるものどものそれぞれのアイデアが常に同じあり方をする(ἢν αὐτῆς αἰετῆς)のを認めないまま、その人は(ἴ)に思考(διανοία)を向けようとするのかわからないだろうし、そのようにして対話することの力を全くもって駄目にしてしまうだろう」(135b5-c2)

パルメニデスは思考が向かう先としてアイデア(形相)を考えており、思考が成立しないならば、思考を基にした語り合いである対話もその効力を失うことになる(10)。一人で沈黙考するにせよ、二人で対話するにせよ、その対象が何であるかを定義しようとするのなら、少なくともその活動の間は(11)、主題となる対象が同一のあり方をしているのでなければ、定義を指す思考も対話も成立しないの言うまでもない。パルメニデスは同一のあり方をするアイデアを思考と対話の対象として特徴づけながら、ソクラテスにアイデアの存在を認める意味を考えさせている(12)。

パルメニデスはさらに、イデアの問題を哲学の成立と関係づける。イデア問題を解決できず⁽¹³⁾、哲学に関してどうすべきか途方にくれるソクラテスに (135c5-6)、パルメニデスは、困惑の原因 (γὰρ 135c8) を彼が訓練なしに美・正義・善といった価値のイデアを定義しようとしている (ορίεσθαι 135c8-9; cf. a2, b7) 点に見出す⁽¹⁴⁾。このやり取りは、二人が哲学の実質を美・正義・善などを定義する営みに見ていることを示唆する。第一部での態度から明らかのように、ソクラテスはイデアと感覚事物の関係について完全に説明できると信じ、その上で〈善〉などのイデアを定義する哲学を実践しているつもりなのだ。しかしパルメニデスは、ソクラテスが一昨日に仲間のアリストテレスと対話する様子を観察して、彼らの哲学が未だ対話の力に支えられていない点に気づき、若い内は大衆が役に立たないお喋りと蔑む「訓練」をきちんとしないと、真理 (τὴ ἀλήθεια 135d6) が逃げてしまうと忠告するのだった。この言い回しは、善・美・正義の探究なら大衆ですらその有用性と真面目さを笑いはしないことを含意する。だが、そうした大衆受けする主題に赴く前に、地味でしつかりした訓練が必要なのだ。実のところ、老哲学者は既に、ソクラテスが大衆の思い (δοκσα) をどこかで気にしながら探究してきたことを暴露していた。

T 2

「君はまだ若いだよ、ソクラテス」とパルメニデスは言った、「私の考えでは、そういったもの『髪や泥など』の何も軽視しない場合に哲学がようやく君を虜にするだろうようには、哲学はまだ君を虜にしきっていないのだ。だが今はまだ年齢の故に君は人々の思 (δοκσα) の方を見つめているのだ」 (130e1-4)

哲学が人を「虜にする・捕らえる ἀντιλαμπνέσθαι」程度には段階の差がある。未熟なソクラテスは大衆のドクサを

気にかげすぎるがゆえに、哲学の深みには全く達していない。パルメニデスによれば、哲学の予備的訓練を積んで對話の力を鍛えてから、善・美・正義のアイデアの定義に赴かねばならないのである。

三 対話の力を養う「訓練」

では、対話の力を養う訓練とはどのようなものなのか。パルメニデスは二つの条件を付けた上で、ソクラテスがゼノンから聞いたヒュポテシスの方法がそれだと言う(εἶ)。これらの条件の内、第一の条件は訓練で議論される対象の存在身分を限定するもので、「はじめに」で触れたように、第一部と第二部を結びつける鍵として本稿の主題の中核となるが、その解釈は次節で行うことにし、ここでは便宜上、ゼノンが先に感覺事物とアイデアを区別せずに自身の方法を用いた一方で、パルメニデスはアイデア(形相)に絞って方法の訓練を行うと条件づけていると理解しておく。

第二の条件は、ゼノンの方法が、探究対象の「それぞれがあるとすれば εἰ ἐστιν ἔκαστον」と前提してその帰結を考察することに制限されていたのに対して、訓練のためにはそうした肯定的な前提に加えて、さらに「同じものがないとすれば εἰ μὴ ἐστιν τὸ αὐτό」といった否定的な前提も考慮しなければならないといったものである。

これら二つの条件を付した上で、パルメニデスは最初にゼノンが主題とした(多)のアイデアを例として、八つの場合を提示する。順序が変わっていたり、省略が施されているが、その点を顧慮して整理すると以下のようになる(εἶ)。

- (一) 多があるならば、(A) 多自体にとって
- ① 多自身との関係で何が帰結するか。
 - ② 一との関係で何が帰結するか。
 - ③ 一自身との関係で何が帰結するか。
 - ④ 多との関係で何が帰結するか。
- (B) 一にとって

(二) 多がないならば、(C) 一にとって

⑤ 自身との関係で何が帰結するか。

⑥ 多との関係で何が帰結するか。

(D) 多自体にとって

⑦ 多自身との関係で何が帰結するか。

⑧ 一との関係で何が帰結するか。

ここで〈多〉と〈一〉がいわば「反対」の性格をもつアイデアとして相互に結びつかないように見える点が重要である。感覚事物についてであれば、ソクラテスが例示したように (cf. 129c-d)、同一物が、例えば観点を変えると、一でありかつ多であることは可能だ。アイデアの場合だからこそ、相反するものの結び付きの可能性が難問として立ち上がり訓練に値するのである。

パルメニデスは〈多〉に続けて、訓練対象の例を列挙していく。それらは、〈似〉〈不似〉、〈動〉〈静〉、〈生成〉〈消滅〉、〈ある〉〈ない〉だが、〈多〉の場合と違って、考察内容が網羅的に詳述されないとしても、反対対立するように見える二つのアイデアが関係づけられて、それぞれ八つの場合が考察されると容易に予想できる。そして彼は一般化して (ἐν λόγῳ 136b7)、どんな対象を扱ふとしても同様に考察しなければならぬと説明を締めくくるのであった。

ソクラテスは以上の説明を聞いて途方もない作業だと驚き (Ἀμύχανον ἢ τροχμαρτέαν 136c6)、パルメニデスにさらに具体的な考察を試みて訓練の実演をしてほしいと要望する。最初は自らの高齢を理由に嫌がっていた老哲学者も、愛弟子ゼノンから助言と要望を得て、終いにはその場で最も若いアリストテレスを相手にして〈一〉それ自体を主題とした考察を引き受けることを決意する。すなわち、彼自身のヒュポテシスである「もし一があるとすれば」と「もし一がないとすれば」を仮定し、そこからの帰結を導くという第二部の探究を開始するのである。

II 「訓練」の対象は何か

前節では、対話篇の前半と後半を繋ぐ「移行部」の議論構成を概観したが、その際、第二部の探究対象を特定する重要箇所 135d8-136a2 については検討を省略した。この節では改めてその箇所を解釈してみよう。まずギリシア語テキストと試訳を紹介する。

1 テキスト (135d8-136a2)

T 3

Οὗτος, εἶπεν, ὄντιερ ἡκουσας Ζήνωνος, πάλιν τοῦτό γε
σου και πρὸς τοῦτον ἠγάσθην εἰπόντος, ὅτι οὐκ εἶδες ἐν τοῖς
ὄραμένοις οὐδὲ περὶ ταῦτα τὴν πάλανην ἐπισκοπεῖν, ἀλλὰ περὶ
ἐκεῖνα ἃ μάλιστα τις ἀν λόγῳ λάβῃαι και εἶδῃ ἀν ἡγήσασται
εἶναι.

135d8

e1

Δοκεῖ γάρ μοι, ἔφη, τῶντι γε οὐδὲν γὰρ εἶπον εἶναι και
ὄμοια και ἀνόμοια και ἄλλο ὅτιον τὰ ἄλλα πύσχογντα
ἀποφύειναι.

Και κατὰς γ' ἔφη, χρηὴ δὲ και τοῦδε ἐπι πρὸς τοῦτό
πρῶτῳ, μὴ μόνον εἰ ἔστιν ἕκαστον ὑποτιθέμενον σκοπεῖν τὰ

τοῦτο ὑποτίθεσθαι, αἰ ποῦναι μὲν ἄλλαν γοημωσθήναι.

「訓練の仕方とは」と彼「パルメニデス」は言った、「君がゼノンから聞いたその仕方だ。但しこの点を除いてなのだが。すなわち、私は君が彼に対して次のことを言っていたのに感嘆したのだ。つまり、君は見られるものどもの内で、それらをめぐる彷徨（矛盾）を考察することを許さず、かのもどもをめぐる彷徨を考察するよう要求する（17）と言って。かのもどもとは、人がとりわけロゴスによって把握し、形相であると考えるだろうものことである」。

「なぜなら、私には」と彼「ソクラテス」は言った、「少なくともこのようにしては、あるものどもが似ていてかつ似ていないだとか、何であれ他のことを蒙るのを証示することは難しくないと考えるからです」。

「実に見事だ」と彼は言った。「だが、このこともさらにそれに加えてなさねばならないのだ、すなわち、もし「各々のものがあるとするは」と仮定する人はその仮定から帰結することを考察するだけでなく、同じそのものが「ないとすれば」と前提しなければならぬのだ、もし君がより一層の訓練を受けたいのであればね」

ソクラテスが「ゼノンから聞いた」（cf. ἀκούοντα 127d6）方法とは、ゼノンが自らの本で展開しているヒュポテシスの方法——或るものがあることを仮定して、そのヒュポテシス（仮定）から帰結することを考察する方法——だが、第1節で触れたように、ここでは二つの限定が付け加わっている。一つは、パルメニデスが「但しこの点を除いて μὴ τούτῳ γέ」（135d8）以下で加える但し書きであり、もう一つは、同じ或るものがないことを仮定して帰結することを考察することである。このような補足とともに上書きされたゼノンの方法が訓練として『パルメニデス』篇第二部で遂行されることになる。だが第二の補足はともかく、第一の補足に関わる 135d8-e7 のやり取りをめぐっては、いくつか不明な点が存在する。「実に見事だ καὶ κωλύς γ'」（135e8）とパルメニデスはソクラテスの考えを評価するが、その理由は何か。三つの問題を検討しよう。

二 第二部の探究対象は何か

第一の問題は本稿の主題である、第二部の探究対象が何か、その存在身分は何かに直結する。M・ミラーは、第二部の探究対象に関しては二つの見解が提出されてきたと指摘し、それぞれ二人の支持者を挙げている(18)。

① 感覚事物+形相 Comford, Schleiermacher

② 形相 Allen, Diès

①の解釈はパルメニデスがソクラテスの考察をまとめるT3のT3e13を「ゼノンと違って、探究対象を感覚対象に制限するのではなく、形相にも拡張した」と理解することに基づく。それに対して②は「探究対象を感覚対象ではなく、形相とした」と解釈する。パルメニデスがソクラテスの姿勢を評価・賞賛しているのだから、この箇所が第二部の探究対象を特定していると考えられる。それゆえ、①②のどちらが適切であるかを決定することは非常に重要である。

ところで、ミラー自身はこの箇所が文脈上129e-130aに遡ると考え、その箇所の理解から①を採用する。その理由は、ソクラテスのゼノン批判——ゼノンは感覚事物と形相の区別をせずに存在物の反対性格を示すが、区別すれば矛盾は解消する——はゼノンが感覚事物のみに、考察を集中した点に向けられていて、彼はゼノンが感覚事物のみならず形相へも探究を拡張すべきだったと批判しているのだから、という点にある(19)。確かに、パルメニデスがソクラテスの発言を賞めているときに129e4-130a2を念頭に置いているのは、二つの箇所が共に感覚(視覚)対象と形相を対比している点からも確実だ(20)。しかし果たして129e4-130a2はミラーが要約しているように解釈できるのだろうか。ギリシア語原文と試訳はこうである。

T 4

Zēnon. taútara dē andrōpeios mēn pánu hēyōhūta periphras-

129c4

teúōthar. pokū mevrān ósde mállon, ós léγω, úyathēn ei
tis éχoi tēn autēn taútēn útopiān ēn autōis tois eídeōn
pavtroúarōs plēkōméhēn, ósrap ēn tois ópōimēnois dñlōthra,
oúros kai ēn tois logoiōi haimōnomēnois eñdeíctai.

130a1

「……ゼノン。一方で、私なりにこれらの問題にとても勇気を奮って取り組んできたと考えます(21)。しかしながら、明言しますが、むしろずっとこのようにして私は感嘆することでしょう。つまり、もし誰かが同じこの困難が、あなた方が見られるものどもの場合に詳述したように、そのようにまさに諸形相の場合に、すなわち、ロギスモスによって把握されるものどもの場合に、様々に絡まり合っているのを証明することができるとしたら、なのです」

T 4でソクラテスは、Less Vivid Futureの条件文を使用して「恐らく無理だろうが」というニュアンスを加味しながら、ある種の困難が様々な仕方で絡まり合っているのを証明できたら、感嘆に値すると述べている。その困難・アポリアとは、例えば、T 3で振り返られていた「同じものが似ていて、かつ、似ていない」というような(一見)矛盾した性質の共在で、ソクラテスの見立てでは、ゼノン(とパルメニデス)は感覺事物の場合にそうした反対性質の共在が様々に絡まり合っているのを詳述したのである。ソクラテスの要求は明らかに、感覺事物と対比して、形相(イデア)の場合にも同様に、例えば、「〈似〉のイデアが似ていない」「〈不似〉のイデアが似ている」といった事態があると示すことにある。彼は、もし誰かがイデア相互の様々な絡み合いがあることを示せたら感嘆するが、それは、そもそもありえないと信じているのだ(cf. 129b1-3)。すると、T 3では「彷徨 τὴν πλάωην」(135c2) (22)と呼ばれて

いるこのアポリアが考察に値するのは、(ないとは思うが)仮にアポリアがあるとすれば、専ら形相間の関係において——ソクラテスの考えはこうであるに違いない。

このように理解されるなら、T3で考察対象が感覺事物から形相へと拡張されたと考えるよりも、素直に文法に従って (*ouk... oide... alla*)、感覺事物でなく形相に変更されていると解する方が自然である。第二部は、形相間のアポリアの存在に対するソクラテスの懐疑をパルメニデスは受けとめて、諸形相の複雑な絡まり合い (*zaxkoleivn* 130a1) の存在を示し、それを言葉によってほぐしていると読むべきである。もちろん、以上の点はT4との関係で決定される限り、129eに至るより広い文脈の中で一層厳密に確かめられなければならないが、その確認作業は第III節の課題としよう。

三 方法か領域か

さて、第二部で感覺事物が探究対象になっていないことは、T3に含まれる二番目の問題点と関係している。パルメニデスのまとめに対してソクラテスは「このようにしては、あるものどもが似ていてかつ似ていないだとか、何であれ他のことを蒙るのを証示することは難しくないと思えるから」と理由を与えるが、M・ミラーが指摘するように⁽²³⁾、「*h*」のようにして *tauton* (135e5) をめぐっては二つの解釈がある。

- ① 「*h*」のような方法によつては」(Allen, Scornicov, Miller)
- ② 「*h*」の感覺事物の領域におつては」(Cornford, Gill, Brisson)

まず①の「*h*」のような方法」とはソクラテスが提示したイデア論を意味する。確かに、イデア論に依拠して、感覺事物が異なる形相を分有することで反対の性質を有していることを示すのは容易であろう。だがそのとき、「あるも

のども *tá ovta*] (135e6) は相反する性格を有する感覺事物に限定されることになるが、第一部で *tá ovta* はイデアにも感覺事物にも区別なく使用されてきた (127e2, 133b1, 134a6-7, 135a2, 135b6; cf. 『バイドン』79a6-7) ので、この箇所だけが例外となるのは不自然である。本節「二」で見たように、*tá ovta* の内のイデアの方が相反する性質をもちうるかをソクラテスは疑問視しているのであり、その考察が困難だと自覚している。他方②の場合、「このようにして」が実質上 *tá ovta* を感覺事物に限定するため、ソクラテスが相反する性格の帰属は容易に証示 (*apodeixivai*) できると表明するのも納得いく。彼は言外に形相間の関係をめぐる考察の困難さ・不可能性を仄めかしているのである。

四 形相とロゴス・思考の関係

T3における最大の問題は、これまで本稿が第二部の考察対象と論じ、単純に「形相・イデア」と解してきたものが、テキスト上はやや複雑な仕方では表現されている点にある。

ekéivai á muásterá tis áv logōv káthō kai eîhē áv hēnōtaro eîvai (135e3-4)
「かのものどもとは、人がとりわけロゴスによって把握し、形相であると考え、^べえら^べらうもの^のことである」

パルメニデスはなぜ簡単に「形相・イデア」と語らず、関係詞節を用いて、人の心的なはたらきを加味した言い回しをしたのだろうか。こうした微妙な表現の中にプラトンのイデア論が単なる存在論にとどまらない重要な見出されるのではないか。そこで、第二部で取り扱われる「かのものども *ekéivai*」が何かを理解するために、関係詞節の内容を三つの観点から究明していきたい。

(i) 前半部の「ロゴスによる把握」とは何か。

従来ロゴスに対しては複数の訳語が与えられてきた。二つのグループにまとめられる。

① 言葉のやり取りとその中でなされる説明 (discourse, rational account, argument) (24)

② 魂の能力としての理性 (reason, raison) (27)

もちろん、①「説明」が②「理性」を必要とすることは疑えないが、②が「ロゴスによる把握」を個人内的な認識に限定するのに対し、①が他者との共同の言語活動である哲学的対話を具体的にイメージできる点で、かなりニュアンスの違いがあると言える。

先に指摘したように、この箇所は類似表現が見出される T 4 (129e-130a) と結びつけられてきた。T 4 で形相は「ロギスモスによって把握されるもの τοῖς λογισμοῖς λαμβανόμενος」(130a2) と言い換えられている。ロギスモスは λογισμοῖς (推論的に思考すること) の名詞表現として単なる「理性」といった知的能力 (reason, raison) ——あるいは理性による直観的把握——よりも、思考の実践もしくはその内実である言葉のやり取り (discourse, rational account, argument 対話) を意味するように思われる(26)。「移行部」導入部でアイデアが思考や対話の対象とみなされていたが(135b5-c2)、そこからの流れを踏まえれば、ロゴスやロギスモスは②理性というより、①思考の実践や言葉のやり取りと解する方が適切ではなからうか(27)。

(ii) 後半部の「形相であるとの思考」とは何か。

殆どの訳者が「形相であると考え(う)るかのものども」と訳し、文法上、関係詞節の中で α を εἶδη … εἴναι の意味上の主語、εἶδη は補語と取り、εἴναι は同一性 identity を意味すると解している(28)。そのため、コンフォードのように「形相としてみなされうるかのものども」と訳す者もいる。

すると、この思考のはたらきは何か。M・L・ギルはこう解釈する(22)。第一部での批判を経験した人(プラトニスト? ソクラテス?)⁽³⁰⁾はアイデアについて不完全な理解しかもっていないことが判明したが、そうした人(τῆς 135e)は第二部の考察対象 *ekleiva* を「アイデアだと思いかもしれない」。だが第二部では、アイデアと目される対象が議論される一方、主題の「一」が空間的存在だった(145b-e)、時間的存在で老いたり若くなったり(151e-155c)、感覚対象であったりして(155d)、その存在身分は奇妙なものである。考察対象を「アイデア」と思いたい人はそう思つて結構だが、プラトンのアイデアについて自分が知っていると思つてゐることは脇に置き、偏見なく考察に臨むべきだ——。ギルの解釈のポイントは、当該の思考は人の「アイデア観」であり、それ自体考察対象 *ekleiva* の内実を規定せず、規定するのは前半の「ロゴスによって把握されるもの」だという点と、アイデアと思つてゐる人とは区別される発言者バルメニデスが第二部の考察対象が何であるかに必ずしもコミットしてゐないとする点にある(31)。

しかし、この解釈は第一部でアイデアを語つてゐる人のアイデア観が誤つてゐる、もしくは不十分であることを前提とするため、当人が「アイデア・形相」の名前で呼んでゐる第一部の対象がそのまま第二部の対象になりえないという主張になる。だが、本節「二」で見たように、第一部のT4と「移行部」のT3はパラレルであり、T4の *oútō tū eión = tū logoiōtō kai phanōmeva* と T3の *tū logōō kai phanōmeva = ekleiva* の間に同一関係が成り立つ以上、*ekleiva* が第二部の対象であるなら、第一部で「アイデア・形相」と呼ばれてゐるもの(*oútō tū eión*)がそのまま第二部の対象であると結論せざるを得ない。また、T3はバルメニデスがソクラテスによる感覚事物とアイデア・形相の対比を賞賛する文脈にあるのだから、否定的評価と共にソクラテス(実際は⁽³²⁾)のアイデア・形相観に言及してゐるとは考えづらい(32)。むしろ第二部はソクラテスのアイデア理解を前提とした議論を展開してゐると読むべきである。

こうしてギルの解釈は文脈上採用しがたいとは言え、他の研究者がこの関係詞節の「思考」のはたらきに格段の注

意を払っているようにも思えない(33)。では、こうした一種「余剰」的表現に何か意味があるとしたら、それは一体何なのだろうか。

第二部の対象がアイデア・形相——「アイデア・形相と想定されているもの」ではなく——であり、*eivou*の用法が *identity* だとしよう。その場合、問題の人(34)は「かのものども||形相」を「形相である」とたたく、考えていることになる。誤認されている対象はアイデアでなく考察に値しない。T3の文脈に戻って考えると、人が「形相だ！」と把握している限りの *ek'eiva* についてだけ(34)、それら相互の結合関係を考察することが要求されるのである。そうであるなら、形相の考察に先立って形相の把握が前提されていることにならないか。なぜなら、関係詞節によって、考察対象である形相が(それとして、把握されているもの)という限定を受けているのだから。考察を開始する現場で、それとして把握されていない形相が考察対象となりえないのは自明の理である。すると、件の「人」は一般的に不定の人、ましてやプラトニストを代表しているのではなく、形相の考察者のことを一般的に表現していると言うべきだろう。T3では、形相がそれをめぐって考察する人との関係でその存在を性格づけられているのである。

(iii) 関係詞節の中の二つの心的はたらきはどのように関係しているのか。
二つの心的はたらきをつなぐ接続詞 *kaí* の役割について注記している研究者は見当たらない。解釈の可能性は二つある。

- ① ログスによる把握がまずあり、そしてそれに基づいて「形相である」との思考が生じる
- ② ログスによる把握が、すなわち、(35)「形相である」との思考である

①は二つのはたらきに因果関係を認める解釈である。(ii)の解釈がただしければ、「形相である」との思考は考察対象が何であるかを限定把握するはたらきであり、この思考があつてはじめて当の対象と別の対象とが形相同士で

どう関係しているのか考察可能になる。他方、ロゴスによる把握が何かは(1)で判明したわけではないが、「形相」として把握する以前に、その把握から独立して、形相についてロゴスで把握するというのは意味不明だ。逆に、「形相である」と把握した対象についてロゴスによって考察を加えるというなら十分理解できるが、その順序では書かれてはいない。

それに対して、②の方は、ロゴスすなわち言葉のやり取りによって対象が把握されることをそのまま「形相である」との思考の成立とみなす解釈となる。例えば、対話の場合だと、その前提として対話者同士が同一のものについて語り合っていることの確認——「相互承認」と呼ぶ——が必要だ。対象の相互承認が言葉のやり取りによってなされてうまく行き、「同じである」何かが共に把握されて、その後の有意義な対話が成立可能になる。だがさらに言えば、対話に先立つて、各対話者が対象をそれとして把握していることが必要である。ここにも魂内での言葉のやり取り——さらにそれに先立つ魂内の一種の「相互承認」——があるだろう(36)。こうした個人の、また対話者相互の対象の把握こそ、まさしく「形相である」との思考の成立を意味するのではないか(37)。「移行部」導入部で、思考と対話の前提としてその都度アイデアが同一なるものとして認められるべきことが語られていたが、ここでは思考や対話によって諸アイデア間の関係を考察することを可能にする前提それ自体に光が当てられ、考察主体によってその対象がロゴスによって同一なる「アイデア・形相」だと把握されるべきことに注意が向けられている。このロゴスは確定した対象について、いろいろと語るのではなく、未だ不定な何かのありのままを思考し対話して語り出して、対象をそれとして捉えるロゴスである。

五 パルメニデスによる評価の謎

以上、「移行部」の内容を概観した上で、第二部での考察対象は「アイデア・形相」であり、しかも考察主体がロゴスによって「アイデア・形相」として把握する限りのものだとする解釈に辿り着いた。登場人物パルメニデスが解するアイデアは、ちょうど第六批判の「二世界説」に代表されるような、人から独立してどこか彼方に存在するような「超越的」存在ではない⁽³⁸⁾。むしろ、それをめぐって思考し対話する人との関係においてその存在が把握されるような何かなのである。

すると一つの謎が生まれる。パルメニデスはソクラテスがゼノン批判で活用したアイデア論を、第一部で徹底的に批判すると同時に、移行部では極めて高く評価しているという謎だ。あれだけの酷評を加えたパルメニデスが、なぜT3では、ソクラテスが試みた「見られるもの」とアイデア・形相の対置に「感嘆 *hýgathý*」(135e1) したと口にし、「見られるもの」が相反する性質をもつことを「証示する *arropoúvav*」(e7)のは容易だとする発言に「実に見事だ *Kai kalós y*」(e8)と賞賛の声をあげたのか。ソクラテスの前のめりな姿勢を微笑みながら暖かく見守り(130a6)、彼の議論への熱意に「感嘆」(130b1)し「美しく神々しい」と評する(135d2-3) 老哲学者の賛辞はアイロニーとも思えない。第二部の考察対象の存在身分の解明を目指す本稿では、アイデア論に瑕疵はあるか／何かには触れず、パルメニデスが下す高い評価の根拠を発掘してみたい。T3が第一部でのソクラテスの理論を振り返っている限り、パルメニデスも価値を認めるアイデア理解はその理論展開の中で発見されるだろう。次節では、ゼノンに対する「ソクラテスの挑戦」(128e5-130a2) ⁽³⁹⁾に遡って検討を加え、パルメニデスが喝破したアイデアの本質的特徴の秘密を探ってみよう。

III 証示と哲学——「ソクラテスの挑戦」にみるイデア理解

一 ソクラテスのゼノン批判

第一部の哲学対話はソクラテスによるゼノンの背理ソクラテスの検討から始まる。

- 1 もしあるものども (*ta ónta*) が多であるなら、それらは似ていて、かつ似ていない。(127e1-2)
 - 2 しかし、これは不可能である。(3)
 - 3 なぜなら、似ていないものが似ていることも、似ているものが似ていないことも不可能だから。(3-4)
 - 4 もし(3)なら、あるものどもが多であることも不可能である。(6-7)
 - 5 なぜなら、もしあるものどもが多であるなら、不可能なことを蒙るからだ。(7-8)
- こうしてソクラテスは、帰謬法的に「あるものどもは多である」という仮説が否定され、あるものどもは「多でない」(127e10, e12-128a1) ことが証明されるとして、この証明の狙いが実質、パルメニデスが詩の形で語る「万有は一である」との説を反対方向からサポートすることにあると暴露するのであった(128d4-b6)(9)。
- ソクラテスがこうも果敢にゼノンという希代のロジシヤンに挑めたのも、彼には世界のあり方を説明する独自の理論、つまり「イデア論」があったからだ。彼は自信満々にゼノンの論理を否定していく。「ソクラテスの挑戦」(128e5-130a2)である。
- ソクラテスは、イデアとそれを分有するものを区別することで、ゼノンの背理は解明できるとする。要約すると――。
- 1 〈似〉の形相がそれ自体であり、それと反対の〈不似〉の形相がある。(128e6-129a2)
 - 2 多なるものどもはそれらを分取し、〈似〉を分取するものは似たものになり、〈不似〉を分取するものは似て

いないものになり、両方を分取するものは似ていて、かつ、似ていないものになる。(a2-b1)

3 〈似〉の形相が似ていないものとなったり、〈不似〉の形相が似ているものとなることはない。(b1-3)

4 〈一〉と〈多〉、〈静〉と〈動〉など、その他の反対のものについても同様のことが言える。(b3-130a2)

以上が中期対話篇で提示されたイデア論の要諦だということ(4)、そしてその理解は様々な問題を含み、さまざまパルメニデスに批判されることに異論の余地はない。ここでは本稿の主題との関係で二点だけ解説をつけよう。

第一に、イデアとそれを分有するものの区別はあり方の区別である。つまり「ある *εἶναι*」の二種類の用法の区別によっており、それが自体性と関係性の側面から省みられている。イデアがそれ自体であるのに対して、分有するものである感覚事物は関係性においてある。関係性は①時間、②相関物、③観点、④人などの諸点からなる。例えば、「似ているものである、A」の場合、①今、②Bと比べて、③顔の形の点で、④観察者の「私」に対して、「似ている」と現われている。①〜④の要素が変化すれば、同じAが「似ていない」と現われうる。様々なものと関係しながら (*περὸν ἄλλα 129b4, πύροχοντα c3*) 「似ている」という性質 (*πρόση c3*) をもつこと——これが〈似〉のイデアに与っている (*μετέχειν, cf. 129a8, b5, 6, c8, d1; μετὰ μὲν ἄλλων, cf. 129a3, 4, 5, 7*) とすることに他ならない。この場合の「ある」はコプラの用法である。

それに対して〈似〉のイデアは、①〜④の関係性から独立して「それ自体であり *εἶναι αὐτὸ καθ' αὐτὸ*」(128e6-129a1)、「まさに似ている *ὁ ἔστιν ὁμοίον*」(cf. 129a2; *ὁ ἔστιν ἐν b7*)。感覚事物にとっての基準であり尺度である限り、「似ていない」あり方はしない。分有するものとは異なり、常に同一のあり方を保つのだ。この場合の「ある」は同一性 (identity) の用法である。この自体性が「離在性 *χωρίς*」(129d7)と結びつくとき、イデアの永遠の自己同一性が強調された「超越性」を帯びてくる。以上は中期イデア論の標準的解釈と言えよう(42)。

第二に、この箇所では反対の性格を有するイデアが議論されている。〈似〉と〈不似〉は「反対 ἐναντίον」(129a1-2; cf. a7)とされるし、一般化されるときにも「反対性」が強調される。

T 5

ei mēn autá tū péne te kai eíōn én autoís únoφαίνοι τάνοντία ταύτα πύθη πρόγοντα, úξιον θεωμάμεν. (129e2-3)

「もし類や形相それ自体がそれら自身の間でそれら反対の性質を蒙るのを人が証示するなら、驚くに値するだろう」

T 5は、自己同一性を保つイデアが別の同一性を保つイデアと同一でないことを主張してはいない。ソクラテスの考えでは、例えば、〈似〉≠〈不似〉はイデアの性格規定から自明である。彼がこの箇所の問題にする「〈似〉が似ていない」「〈不似〉が似ている」はそういった同一性の否定ではない。「性質を蒙る πύθη πρόγοντα」という表現が示すように、感覚対象である「似ているものが似ていない」「似ていないものが似ている」と同様に、イデアの分有・分取によって説明されるコプラ的あり方の否定なのである。

そこで次のようにソクラテスが一般化して、ゼノンに証示を迫るのも、反対のイデア間の関係をめぐるものであり、そのようにして第II節「二」の議論が確証を得ることになる。

T 6

... éōn ós τις óōν

129d6

νουνή ἐνὼ ἐλαστον πρώτον μὲν διαμῆται χωρὶς αὐτά καθ'

αὐτά τὰ εἶδη, οἷον οἰμοίωσιτά τε καὶ ἀνομοίωσιτά καὶ πλῆθος

e1

καὶ τὸ ἐν καὶ οὐσίῳ καὶ κίνησιν καὶ πέντα τὰ τοιαῦτα,
 εἴτα ἐν αὐτοῖς ταῦτα δύναμενα συγκεράνωσθαι καὶ δια-
 κριεῖσθαι ἀποφάνη, ἀγρίμην δὲ ἔχει, ἕση, θαυμαστός, ὦ
 Ζῆνων· …

「だが、もし人が、第一に、たった今私が語ったものども(43)から区別して形相——例えば〈似〉と〈不似〉や〈多〉と〈二〉や〈静〉と〈動〉やすべてそのようなものをそれ自体で区別し、それからそれらが自身の間で混合されたり分離されたりできるのを証示するようなら」と彼は言った、「少なくとも私は感嘆することでしょう、驚くほどにね、ゼノン」

T 6におけるソクラテスのゼノンへの要求は二つの段階からなる。第一段階は、相反するアイデアを感覺事物から区別すること、これは最初からゼノンに要望していたことだ。アイデア論を認めると背理は解決されるだろう。第二段階は、相反するアイデアがそれら自身の内で (cf. 129c2) 「混合 *συγκεράνωσθαι*」 「分離 *διακρίνωσθαι*」 できるかを証示してほしいとの要求である。先の議論を受けた一般化として、「分離」が同一性の否定(と確定)、「混合」が分取・分有関係を表すなら、例えば、彼は分離関係にある〈似〉のアイデアと〈不似〉のアイデアが、相互に反対であるにもかかわらず、いかにしてお互いを分取できるのかと問い、恐らく、それは不可能だと確信しているのである(44)。そして第II節「二」で引用したT 4が続くが、T 6のこの箇所では感覺事物ではなく、アイデアが相反する性質を帯びうるか否かが問われているのだから、ソクラテスはT 4でも、アイデアが反対のアイデアを分有することによって反対性質をもつことがあるなら、それを証示してほしいと「挑戦」していることになろう(45)。

二 「証示 ἀποφαίνειν」とは何か

さて、「ソクラテスの挑戦」から目下の謎である彼のイデア理解について何が明らかになるのだろうか。ソクラテスは反対のイデアの関係について証示を要求しながら、それが無理だと考えている。その理由を探ることで、彼のイデア理解がより明瞭になるのではなからうか。パルメニデスがなぜ彼の見解に高い評価を与えたのかもわかるように思われる。

最初に注目すべきは、ソクラテスが、イデアが反対性質をもつことは証示できないと主張するとき、彼は「証示」とは何かを具体的にイメージしながら、そう主張しているに違いないことだ。T3でも感覺事物が相反する性質をもつことを「証示すること」と ἀποφαίνειν (135e7) は難しくないと振り返っていたが、その典拠となる「ソクラテスの挑戦」には ἀποφαίνειν という語が集中的に八回も登場する (129b1, 4, 5, c2-3, 5, d2, 3, e3) (46)。この語は「論証する ἀποδεικνύουσι」(129b7, c4, d4)・「証明する ἐπιδεικνύουσι」(130a2)と区別されていないが、基本的には「証示」の理解が基にあり、「論証・証明」へと言い換えられているという意味で、この箇所での「証示」の情報量上の優位は動かない(47)。では「証示」とはどのような説明方式なのだろうか。この節ではこの点を確認したい。ソクラテスが提出する証示の具体例を見てみよう。

T7

ei δ' εἴη ἐν τις ἀποδείξει ὄντα καὶ πολλαῖ, τί θουμιστόν,
λέγων, ὅταν μὲν βούληται πολλαῖ ἀποδείξει, ὡς ἔρεσα μὲν
τῷ ἐπὶ δεξιᾷ μου ἔστιν, ἔρεσα δὲ τῷ ἐπ' ἀριστερᾷ, καὶ ἔρεσα

129c4

μήν τὰ πρῶτον, ἔρεπα δὲ τὰ ὀρθότεν, καὶ ἄνω καὶ κάτω
 ὁσαύτως—πλήθους γὰρ οἴμαι μετέχει—ὅταν δὲ ἐν, ἐπαὶ ὄς
 ἐπὶ τὰ ἡλιὸν ὄντων εἰς ἐγὼ εἶμι ἀνθρώπος μετέχων καὶ τοῦ
 ἐγὼς, ὅσπε ἀληθῆ ἀποκρίναι ἀποφύερα. ...

dl

「だが、もし誰かが次のように語って、私が一人でありながら多でもあると論証するだろ、うなら、どうして驚くべきだろうか。すなわち、その人が一方で、私が多であることを証示したい場合には、私には右側、左側、前面、後面が別々にあり、上部も下部も同様にある——思うに、私は《多》を分有しているのだから——と語り、他方で、一であることを証示したい場合、その人は、私が(一)をも分有して七人いる私たちの内の一人である、と言うだろう。その結果、彼は両方が真実であると証示するのだ」

この事例は「証示」とは何かを知るのに示唆的である。

(i) まず、「証示」は対話の文脈で用いられている。T7でソクラテスは、「多かつ一」という一見矛盾した事態が惹起する疑問に対して、ある人が(a)「多である」理由を説明し(ἀξίον 129c5)、(b)「一である」理由を話し(ἐπαὶ c8)、(c)二つの真なる答を総合して結論を与える(ὅσπε dl)。論証を紹介している。論証を構成する(a)(b)(c)は個々の疑問に対して理由を説明する応答として一連の対話を織りなしており、それぞれが証示だとみなされているのだ。証示の成功は一方的な発話ではなく双方向的な相互理解の実現を意味するのである。

(ii) 「証示」は現場性を成立要件とする。ソクラテスは証示の対象として自分自身を扱っている(ἐπε 129c4; μὲν c6; ἐγὼ εἶμι dl)。そのことよって現に「今」「こゝ」で対話に関与している「私たち ἡμῶν ὄντων」(dl)自身が証示の文脈に巻き込まれるのである。したがって、身体性を伴った感覚現場である側面が強調される。「ソクラテスの挑戦」冒頭でも、「多 πολλά」(129a3)である感覚事物の例として真っ先に挙げられたのが「私」と「あなた」だっ

た (a23)。特に証示の対象が感覺事物である場合、分有関係を構成する①時間、②相関物、③観点、④人が関わるが、(ii)では証示の主体 (πρ 129c4) が対話相手とするソクラテスが、証示の主題であると同時に④として事態を構成している。

(iii) こうして中期イデア論の *locus classicus* である『パイドン』の「背丈比べ」の箇所 (102a-103a) との類似性が際立ってくる (48)。そこでのソクラテスは、その場にいるシミアスやパイドンを巻き込み、「シミアスは大きくて小さい」という事態を、シミアスはソクラテスとの関係では〈大〉のイデアを分有して「大きい」が、パイドンとの関係では〈小〉のイデアを分有して「小さい」という仕方で説明するのである。これが説明として機能するのは、その場にいる人々が、シミアスやソクラテスなどの背格好を感覺的に把握するのみならず、「内在形相」と呼ばれるシミアスの「大」がソクラテスの「小」を「凌駕する *ὑπερέχειν*」関係を観取し、シミアスの「小」がパイドンの「大」によって「凌駕される *ὑπερέχασθαι*」関係を観取しているからだだった。

T 8

Ὅντος ἴσου ὁ Σιμίτιος ἐροννομιῶν ἔχει σικκρός τε καὶ
102c11
μέγας εἶναι, ἐν μέσῳ ὄν ἀμφοτέρων, τοῦ μὲν τῷ μεγέθει
ὑπερέχειν τῆν σικκρότητα ὑπέχων, τῷ δὲ τὸ μέγεθος τῆς
δι
σικκρότητος ὑπερέχων ὑπερέχων. . .

「したがって、シミアスがその場に「小さくて大きい」という呼び名をもつのは、両者の真ん中にいて、一方「パイドン」の「大」が「小」を凌駕するのを認めつつ、他方「ソクラテス」には「大」を「小」を凌駕するものとして差し出すことによってなのだ」

「大きくて小さい」との事態の説明は、個別性を備えた内在形相間の関係の描写によって完成する。「凌駕する／される」という関係として説明される「大である」形(Ⅱ〈大〉のイデア)と「小である」形(Ⅱ〈小〉のイデア)が眼前に現われていることが対話者の全員で相互承認されるのだ(49)。

このようにして「証示」は、対話者たちが言葉のやり取りを通じてイデアの分有構造の中に巻き込まれると同時に、イデア認識の共有を通じてその事態を内側から——説明の対象Ⅱ主体として——一緒に作りあげる共同作業となるのである。

(iv) T7はそれ自体「証示」とは何かを証示している。T7は証示の個別事例の紹介であるばかりか、証示の普遍的なあり方を指し示しているからである。証示において、個別事例はその時間・空間にいる対話者のみならず、その時間・空間にいない誰もが同意できる (cf. *ἄραp ἄν ἡδύνατ' ὁμολογοῦμεν* 129d6) 普遍性を帯びた「範例」となる。つまり証示とは、疑問の対象となっている事柄を明瞭に代表する具体的典型例 (paradigmatic exemplar) を通して、現場でその範例と関わる複数の人々が一連の問と答からなる対話をしながら、同一の事柄をめぐって自分たちの存在把握を相互に承認し合う活動と言えよう(50)。証示活動の中で、個別に関わる問と答のやり取りの中に、対話者たちのイデア把握が息づいていることは言うまでもない。

さて以上の特徴から、感覚世界のあり方をイデアの分有によって説明するイデア論が「証示」という独特の言語活動と密接な関係をもつことを推定できよう。パルメニデスはソクラテスのイデア論のこうした側面を高く評価し、イデアの存在が対話とそれを構成する思考(Ⅱ自己内対話)にとって不可欠だと表明したのではないか。証示は半ば感覚的に現われた形(Ⅱイデア)を思考によって言葉化して承認し合う対話の産物だからである。では他方で、ソクラテスが「挑戦」で強く成立を疑っている「(似)が似ていない」「(不似)が似ている」「(一)が多である」「(多)

が一である」という事態の証示については、一体どのように解釈することができるのだろうか。

三 「〈似ている〉それ自体」とは

第Ⅱ節で明らかになつたのは、『パルメニデス』第二部で対象となるのはイデア・形相であり、それも考察主体がロゴスによつて「イデア・形相」として把握する限りのものということだった。老哲学者は、ソクラテスが「挑戦」で試みた考察対象のこうした特徴づけを評価したのだ。では、ソクラテスのイデア理解はどう披瀝されているのだろうか。その手掛かりは次の箇所にある。

T 9

... εἰ μὲν γὰρ αὐτὰ τὰ ὅμοια τῆς ἑμ-

129b1

ἑσθαιεν ἀνόμοια γινώσκοντα ἢ τὰ ἀνόμοια ὅμοια, τέρας ἂν
οἴμαι ἦν. ...

「というのは、一方で、もし彼に誰かが〈似ている〉それ自体が似ていないものとなったり、〈似ていない〉が似ているものとなったりするのを証示することがあるなら、驚きだろうと私は思います」

これまで本稿は説明なしにT 9を「〈似〉のイデアが似ていない」「〈不似〉のイデアが似ている」が証示不可能とみなされている典拠としてきた。だがT 9は〈似〉のイデアのために αὐτὰ τὰ ὅμοια という異様なフレーズを採用するため、その解釈は一樣でなく論争の種でもあったのだ。「異様」と言うのは唯一性・単一性を特徴とするイデアが αὐτὸ τὰ ὅμοιον の単数形ではなく複数形で表現されているからである(註)。例えば、F・M・コンフォードは、イデア

ともそれを分有する感覚個物とも區別して、まさに単純に「似ている」として定義される第三の存在者を導入して、複数形の困難を解決しようとしている(52)。

しかし明らかに「ソクラテスの挑戦」で対比されているのは、矛盾した性質をもちうる感覚個物と決してもちえないアイデアであり、第三の存在者が入りこむ余地はない。〈似〉〈不似〉のアイデアと並んで例示される〈一〉と〈多〉のペアについても、「一である *ἓστιν* ἐν,まさにそれが多であり、また〈多〉が一であるのを人が論証するだろうから、最早そのことに私は驚くだろう」(129b-c1)、「〈一〉は多でないし〈多〉は一でないし、またそう語ることに *ἀετιν* は何も驚くべきことではない」(d5-6)と述べられており、当の対象がアイデアを指すのに紛れはなく、第三者は導入されていない(53)。

だが *αὐτὰ τὰ ὁμοία* が〈似〉のアイデアを指すなら、ことさらなぜ複数形表現が用いられたのだろうか。こうした表現の使用にはアイデアの存在に特殊な事情があるのではないか。アイデアと感覚事物の対比が「証示」の文脈で実行されていることと関係がありはしまいか。以下この表現の謎を解き明かしつつアイデアと証示の関わりを探っていく。

まず、T9が(現在の)事実と反対のことを仮定する「反実仮想」である点に注意しよう。ソクラテスが〈似〉のアイデアが似ていないものになることを証示不可能だと考えた理由は何か。仮に証示が可能だとすると、本節「二」の考察から、対話する者たちに〈似〉のアイデアが〈不似〉のアイデアを分有して「似ていない」と現われることになる。そのためには個々の対話者に主題である〈似〉のアイデアが把握されているばかりでなく、その把握が共有されていないければならない。同じ〈似〉についての対話なのだから。では〈似〉の相互承認はどのような形でなされるのか。

『パイドン』の「背丈比べ」を想起したい。シミアスを中心とするソクラテス、パイドンとの比較の内に〈大〉〈小〉が相互承認されるのはどういう場面か。「シミアスは大きく、かつ、小さい」という事態は、例えば、シミアスの同

じ、背丈一七〇センチが、ソクラテスの一六〇センチとの関係で「大」の内在形相をもち、パイドンの一八〇センチとの関係で「小」の内在形相をもつことであり、この記述を可能にするのが「凌駕する／される」という形で、そこにありありと現われる〈大〉と〈小〉のイデアである。イデア論による事態の説明は、対話者がこれら両イデアを疑いなく相互承認することによって成立する。これが「証示」の特徴の一つだった。

同様に〈似〉の場合も、その相互承認は既に個別の「似ている」事態の証示的説明の中ではたらいっているはずである。例えば、「Aは①今、②Bと比べて、③顔の形の点で、④観察者の「私」に対してどういう関係か？」との間に、「似ている」という答が導かれる証示において——ソクラテスのつもりでは——感覚現場にいる対話者の間で〈似〉の現われが共有されていなければならない（『テアイテトス』143e, 144d-e 『政治家』257d 参照）。

〈似〉のイデアに関する証示を対比させるなら⁽⁵⁴⁾、感覚的に相互承認が自明なAとBと違って⁽⁵⁵⁾、まずもって同じ、〈似〉について対話しているかを確かめる相互承認が必要になる。〈似〉の相互承認は、原因としてのイデアが理論上そこにおいて本来はたらいっている場面である、まさしくこの感覚現場での〈似〉の現われを源泉（アルケー）とするだろう。個物の証示の現場（今ここ）で、対話者は注意をイデアへと向け変えることで、感覚事物から①〜④の関係性を捨象して、原因としての〈似〉のイデアを自体性そのままに把握し直すのだ。その際、対話者が〈似〉を言語的に表現するなら、出発点は「これらAとBは似ている」という事態（*ταύτα τὰ ὅμοια*）——「似ている」事態は複数のものから構成される——だが、それを原因根拠づけている〈似〉は事態の個別具体的現場性から引き離されてそれ自体（*αὐτὸ*）で捉えられるため⁽⁵⁶⁾、*αὐτὰ τὰ ὅμοια*——複数のものにおける自体的なイデアの端的な現われ——という一見異様だが実は自然な方式を採用するのではないか⁽⁵⁷⁾。謎の複数形は今ここで対話者が〈似〉を問題にする証示の現場性を反映している、という解釈である。

この *avtá rá ôiōta* の解釈は、「イデアは本来的に感覚と思考が交わりあう証示的対話の現場で把握し直される」といった、イデアの本質的特徴を開示する。この特徴からすれば、イデアの探究とは、①～④の諸要素を中心に生成流転する感覚世界においても、人が常に変わらない同一なる形を把握できる場面があり、その場面での把握の実態を対話の中でそのまま言葉にしながら共同に明らかにする営為だと言える。そうだとすると、第Ⅱ節で見たイデアの性格描写との一致が認められるのではないか。イデアとは思考や対話の主体である考察者によって「常に同一のイデアである *idéan … tiv avtíh dei éivai*」(135c1)と捉え返されたものだから(58)。イデアはそれと出会う人の個性を前提・出発点としながらも、目の前の対話相手に説明を試みることで普遍性を高めていく運動の中で常に触れあっている対象なのである(59)。

この解釈から T3 と T4 の内容はより豊かに受けとめられるだろう。ロギスモスやロゴスとは、眼前対象が備えている①～④の個別性を剥奪する過程の中で、別の似通ってはいるが異なる状況で同一の性格が認められるかそれとも反対の性格となるかを言葉にしながら、相反する特徴を比較し分離して、常に変わらない方を見出す作業である(60)。その作業により把握されたものが、「これこそイデアだ」と思考されることになるのだ(61)。T3 と T4 でパルメニデスは、ソクラテスのこうしたイデア理解を高く評価したのではなからうか。

だがしかし、パルメニデスが若者に高評価を与えるのもここまでだと言わざるをえない。「挑戦」を受けたパルメニデスはイデア論を多角的に批判し、「移行部」でも哲学の深みに達していないソクラテスには訓練が必要だと忠告するのだから。本稿は第一部のイデア論批判について検討はしないが、それでもソクラテスが哲学の正道から離れていると査定されている点は見えておきたい。ソクラテスのイデア理解にはやはり何か大きな過誤が含まれているに違いないのである。

四 ソクラテスの現在地——哲学の再出発のために

「三」ではあえて踏み込まなかったが、実のところソクラテスのイデア理解は *oûra tū oîonai* 的経験の明証性と裏腹に浮かび上がるある重大な過ちを抱え込んでいた。彼の存在そのものに関わるという意味で重大な過ちなのだ。以下、彼の魂の内側に分け入ってみよう。

確かに、ソクラテスが自身の理論の根本に据える *oûra tū oîonai* の経験は、「移行部」T3で示した、対象をロゴスによって把握すること、すなわち、思考 (*hýphaurō* 135e3) によって「イデアだ！」と明証性の内に捉えることとみなしう。またこの思考は対象についてあれこれ考えて判断を下す、真／偽となりうる「思い」ではなく、例えば、関係が不明な眼前対象AとBに類似性を見出し「似ている！」と叫ぶときのような、永遠の自己同一性を保つイデアの現われを見出し、「似ている」事態に自ら参与する経験である。反対の「似ていない」との認識も同様だから、それぞれの経験の原因根拠となる〈似〉と〈不似〉が混合することなどありえない。それは反対のイデアである〈大〉〈小〉の場合と同じだ⁽⁶⁾——T9で「反実仮想」を採用した裏にあるソクラテスの心の動きはそう推察できる。

しかしながら、思考や対話の前提となる〈似〉〈不似〉の明証性は、あくまで個人におけるそれである点に注意したい。なるほど、本節「二」「三」で類比的に用いた〈大〉〈小〉の場合、「凌駕する／される」という形でそれぞれの定義・説明形式が存在し、対話に携わる者たちの間で共通了解が成立している⁽⁶⁾。それゆえ、「大／小とは何であるか」を知っている者たちにとって〈大〉⁽⁶⁾〈小〉は自明なる前提だし、「背丈比べ」の個別事例は範例としてイデアの相互承認の本源たりうる。だが他方、〈似〉〈不似〉の場合はどうか。ある個別事例が「私」に「似ている」と明証性をもって現われても、「あなた」には「似ていない」とこれまた明々白々に現われることも頻繁だし、互い

を説得するより普遍的な説明方式と定義の獲得は困難ではなからうか。個別事例の範例化は簡単ではなく、相互承認の源泉は見出しづらい。

たまたま二人の間に相互承認が生まれたとしても、〈似〉〈不似〉の定義と体系的理解なしには、その場の二人という制限を越えた常なる自己同一性を把握した保証にはなるまい⁶⁴。実際、個別事例を限定する①〜④の要素を捨象しながら、〈似〉〈不似〉の何であるかを探究する作業(*epistēmonē*)は容易ではない。あらゆる事態・存在者に様々な仕方に関わる〈似〉〈不似〉は、量的関係を中心に「凌駕する／される」という一様な説明方式が現に日常的に成り立っている〈大〉〈小〉とはかなり事情が異なるのだ。にもかかわらず、恐らくソクラテスは単に反対であるという特徴から、〈似〉〈不似〉や〈一〉〈多〉、さらにT6では〈静〉〈動〉等に至るまで相互分の証示の可能性を否定したのである⁶⁵。パルメニデスが「移行部」(136a-c)でこれらの対象をめぐる「訓練」が必要だと論じるとき、彼にはソクラテスのこの過ちを正す意図があったのではなからうか。

別の角度から言えば、パルメニデスが「訓練」に先立ちイデア論批判を企てるのも、ソクラテスをして諸々の反対のイデアを一緒くたにする過ちに気づかせざる狙いがあったのかもしれない。つまり「訓練」の対象として主題化される諸イデアが、イデア論によって説明されるのではなく、むしろ説明項として理論自体を構成しているため、理論から独立した説明が必要となるという事実⁶⁶に気づくべきなのだ。〈似〉のイデアは分有関係一般を説明する鍵となるし(cf. 132d-133a)、〈一〉と〈多〉も〈全体〉と〈部分〉と密接に絡むイデア論の構成要素である(cf. 131a-132b)。〈静〉と〈動〉も存在と生成の原理に関わると言えよう。その他〈同〉〈異〉〈限〉〈無限〉については言うまでもない。これらのイデアは、現象の部分⁶⁷を占める〈大〉〈小〉と異なり、現象の全体を通して浸透し、ペアの枠をも越えて相互に混合・分離することによって、現象のあることそれ自体に深く関わるのである(『ソフィスト』253b-c参照)。

ソクラテスはパルメニデスやゼノンとの対話が新たな局面に達しているのに全く気づいていない。

そして何よりも深刻なのは、こうした過ちが「挑戦」のソクラテスから哲学の大いなるきつかけを奪ってしまうことである。きつかけとは他でもない、「驚き」である⁽⁶⁶⁾。パルメニデスと共に読者は、「相反するイデアの混合・分離が証示されたら驚くだろうが、それはありえないから、イデア論を信奉する私は驚かない」と囁くソクラテス、しかしその実、哲学の道を見失ったソクラテスを目の当たりにする。彼の魂の奥底に巣くうのは〈似〉〈不似〉〈多〉等について知っているとの思いである。その思いによって、彼は自身にありありと立ち現われる〈似〉を相互承認の域にまで飛躍させてしまった。これは、プラトン初期対話篇以来、大切なことについて自分が知らないの知っていると間違っている状態——自分が知者でないのに知者だと思ふ魂の状態——として「無知 ἀγνοῖα」（＝学びの欠如）と呼ばれてきた最大の悪に他ならない⁽⁶⁷⁾。若きソクラテスの現在地はここにあった⁽⁶⁸⁾。

したがって、今ここで無知なるソクラテス（！）が本来なすべきは、日々善・美・正義の探究に勤しむ代わりに、〈似〉〈不似〉等について知らないことを自覚して、しかしありありと経験する *αὐτὰ τὰ οὐραῖα* 的イデア把握を言葉であるが、まさに、語る証示に従事することであろう。それは〈似〉がある、とはどういうことか、〈不似〉ではないのはいかにしてかを問い、〈似〉〈不似〉の本性（ピュシス）を分離の作業（＝本質論）を通じて明らかにすることであると同時に、両者が相互に分有し合って互いの性質（パトス）を有する可能性を、他の様々なイデアも含めた混合の作業（＝言語・思考論）により確認することになる⁽⁶⁹⁾。そのためパルメニデスは、T 6で「挑戦」を自信たつぷりに締めくくったソクラテスに対して、中期イデア論の不備を指摘するだけでなく、「移行部」でこのような「訓練」が不可欠だと強調し、「すぐれた資質をもつ *παννυ … εὐποροῦσιν*」（135a7; *μη ἀπονήσκει* 133b8）若者が「アポリアの中で *ἐν ἀπορίᾳ*」（130c3; cf. 129e6, 130c7, 133a8, b1, 135a3）「多への経験を積んで *πολλῶν … τῶν αἰετιπείρων ὄντι*」（133b7）も

う一度哲学の道を歩み出すよう促すのである。

むすび

本稿は『パルメニデス』の第一部と第二部を繋ぐ「移行部」の読解から出発し(第Ⅰ節)、第二部で取り扱われる対象の存在身分を明らかにしようとした(第Ⅱ節)。結論的に言えば、第二部で議論される「一」「多」「他」「同」「異」「限」「無限」などは、感覺事物ではなくイデア(形相)である。だがそれも単なるイデアではなく、考察者がロゴスによって「イデアである」として把握している限りでのイデアなのだ。こうした不思議な特徴づけをさらに理解するために、第一部前半の「ソクラテスの挑戦」で提示されているイデア論の分析を試みた(第Ⅲ節)。その結果、*outro tu quow* という複数表現を手掛かりとして、「イデアである」との把握とは、人が生成変化する感覺経験に参与する仕方で、常に同一性を保つ形の現われを経験することだと解釈した。このようにして第二部を、考察者が対話の現場で(へー)などのイデアと関わり合いながら、イデア間の分離・混合のあり方を自らに現われるがまま言葉にしていく探究、と読む可能性が拓かれたのである。

さて以上の考察は「はじめに」で言及した諸問題について何を告げるだろうか。暫定的な答と本対話篇がプラトン哲学にとつてもつ意味の見通しをごく簡潔に記しておきたい。

(i) 第二部の対象をイデアとするとき、それは中期イデア論のイデアと同じ身分なのか。

第一部で批判されるイデア論が中期のそれだとすれば、「移行部」のイデア、さらにそれを受ける第二部の対象たるイデアも同じ身分と言わざるをえない。重要なのは、『パイドン』のイデア原因説からも明らかのように、元来イ

デアは感覺事物の存在・生成・消滅の原因として導入され「現象を救う σώζειν τὰ φαινόμενα」役割を担っており、デアの考察は常にこの現象の場面に戻ってなされるべきということである。その上で対話者たちはアイデアが背負う出自の現場性に影響されながらも、その何であるかをそれ自体で把握しなければならぬ。 οὐτὰ τὰ ὄντων の複数形の秘密はアイデアが現場性の残滓を宿しつつ、同時に証示の対象であるところにあつたのだ。

(ii) 中期アイデア論と後期アイデア論の区別や分断は存在するのか。

本稿は *idea, eidos* に加えて後期に頻出する *typos* にしても中期から後期にアイデアとしての身分が変化したとは読まない。「論」の変化に関してむしろ注意すべきは、〈善〉〈美〉〈正義〉のアイデアの探究の継続性とその探究のために招喚されるアイデアの種類の変容である。中期においては、主として〈大〉〈小〉〈等〉が感覺世界の相反現象を説明するアイデア論のモデルとして導入され、それとの類比やその他魅力に富む比喩・ミュートスに基づいて〈善〉〈美〉〈正義〉のあり方は示された。一方『パルメニデス』では、感覺的事態ではなく、諸アイデア間の相反関係を現象化する〈似〉〈不似〉などのアイデアに関心が移動し、アイデア相互の交わり合いのあるがままを言葉（ロゴス）で表現する訓練が〈善〉〈美〉〈正義〉の「定義 *opisodai*」の探究に資すると考えられている。この点のさらなる理解のためには、「定義」の実践それ自体に〈似〉〈不似〉のみならず、〈一〉〈多〉〈動〉〈静〉〈同〉〈異〉〈限〉〈無限〉等がどう関わるかを、『ソフィスト』『政治家』『ピレボス』等で展開される後期デアアレクテイケーの適用の内に見つめる必要があるだろう。

(iii) 『パルメニデス』の執筆意図は何か。

第一部の「ソクラテスの挑戦」を受けたパルメニデスによるアイデア論批判、「移行部」での忠告、第二部での「訓練」の実践といった対話篇の一連の流れを支配するのは、現状無知だが資質επιστημηに秀でた若者ソクラテスの哲学への再出

発というモチーフである。アイデア論という素晴らしい武器を手に入れたと信じ込んでいるソクラテスは、大衆のドクサ (δόξα 130c4) も意識しつつ、哲学の本丸とも言うべき〈善〉〈美〉〈正義〉の定義に乗り出してゐる。しかしゼノン¹は、大衆 (οἱ πολλοὶ 136e1) に不明な²こととして「アイデアの交じり合いを」すべてを通じて詳細に記述し彷徨することなしには、³「⁴真実と出会う⁵て知性をもつ⁶」と ἐντυχόντα τῷ ἀληθεὶ νοῦν σχεῖν は不可能だ⁷ (136e1-3) と断言する。パルメニデスもソクラテスに、大衆が役に立たないお喋りだと思つて (δοκούντες 135d4) 「訓練」に励まなければ「真理 τὴ ἀληθεῖα は逃れてしまつて」 (135d6) と警告を与える。逆に言えば、「⁸精確に真実を見ようとする⁹ κριτικός διαγινώσκοντα τὸ ἀληθές」 (136c4-5) なら、完璧に訓練をやり遂げなければならないのだ。「すべてを通じての詳細な記述と彷徨 τῆς δόξης πᾶντων διαγινώσκοντα τε καὶ πλάττωντας」 (70) を完全に (τελέως 136c5) やり通すことが、元来部分でしかない状況の中に埋没した大衆のドクサから離れて、全体たる真理に向き直るためには重要なのである。

「移行部」の狙いが、大衆のドクサから真理への「魂の向け変え」を意識した、エレアの哲学者たちのいわば「上から目線」(cf. ὑπερ ἡμῶν τοῦς ἀλλοῦς 128b5-6) (71) の「啓蒙」的忠告かつ激励に行き着くなら、『パルメニデス』はあたかも「¹⁰義父」の立場から (72)、善・美・正義の探究に挑む若者を新たな探究の道へ誘つてゐるよう¹¹にみえる (73)。大衆すら魅了するミュートス・¹²¹³¹⁴¹⁵¹⁶¹⁷¹⁸¹⁹²⁰²¹²²²³²⁴²⁵²⁶²⁷²⁸²⁹³⁰³¹³²³³³⁴³⁵³⁶³⁷³⁸³⁹⁴⁰⁴¹⁴²⁴³⁴⁴⁴⁵⁴⁶⁴⁷⁴⁸⁴⁹⁵⁰⁵¹⁵²⁵³⁵⁴⁵⁵⁵⁶⁵⁷⁵⁸⁵⁹⁶⁰⁶¹⁶²⁶³⁶⁴⁶⁵⁶⁶⁶⁷⁶⁸⁶⁹⁷⁰⁷¹⁷²⁷³⁷⁴⁷⁵⁷⁶⁷⁷⁷⁸⁷⁹⁸⁰⁸¹⁸²⁸³⁸⁴⁸⁵⁸⁶⁸⁷⁸⁸⁸⁹⁹⁰⁹¹⁹²⁹³⁹⁴⁹⁵⁹⁶⁹⁷⁹⁸⁹⁹¹⁰⁰ 比喩・類比に彩られた中期対話篇とは異なる、『パルメニデス』の新しい証示の方法 (メトドス) は、徹底した批判を通じて若者にまとりつくドクサを剥奪すると共に、ドクサと現象の根底に横たわるアイデアの本然のあり方へと向き合わせ、哲学の先達の言語使用——アイデアからなる世界の切り分け方——をなぞらせる仕方で真理との出会いを導く回路となる。そうして、対話篇は真理の光の中でヌースをもって哲学の道を再度歩み出す若者の姿を範例化する。作者の執筆意図をそこに見出せれば、その意味で『パルメニデス』は後期プラトン哲学の新しい始まり¹を告げる作品²と言えらるだろう。

注

- (1) 最も影響力のあった論文は一九五三年初出の Owen (1986), 65-84 である。
- (2) 「移行部」の重要性については Meinwald (1991), 28; Gill (1996), 50-62 参照。
- (3) 藤澤 (2014), 104-105: 「プラトンが『アルメニデス』を転機として、以後イデア論を放棄したということがありえないのは、プラトン自身がアルメニデスに語らせたこのエピソードだけでも明白と言いきださう」(強調は藤澤)。
- (4) Kahn (2013), 19-21 は第二部の「一」の存在身分について
(1) プラトンのイデア、(2) 一性／一つであるという性質、(3) 一つであるものすべて、とどう三つの可能性に言及する。
- (5) 但し、第二部で εἶδος が 149e7, 9, 158c6, 159e5, 160a1 と五回登場するのに対して(第一部・移行部: 五一回)、ἰδέα は 157d8 に一回(第一部・移行部: 六回)、γενος は皆無(第一部・移行部: 四回)である点も注目に値する。一般に、εἶδος と idéa が中期と後期のイデア論に共通して用いられるのに対し、γενος は後期に特有だからである(但し田中伸司氏から『バイドロス』は取扱注意との指摘を受けた)。なお、本稿では「イデア」「形相」の訳語を区別せず使い、イデア・形相を「くく」で括ることがある。
- (6) プラトン著作群の初期・中期・後期のグループ分けや相互連関に関する最近の動向については、早瀬 (2019) に丹念な調査と詳細な検討が見られる。
- (7) アルメニデスによるイデア論批判は、①イデアの存在範囲を巡る議論(130b-e)、②全体と部分からの議論(130e-131e)、③〈大〉のイデアの無限進行(132a-b)、④イデアを思念とする困難(132b-e)、⑤〈似〉のイデアの無限進行(132c-133a)、⑥イデア世界と感覚世界の分断による議論(133a-134e)の六つからなる。
- (8) 本稿では第六批判の内容の検討考察は行わない。藤澤 (2014), 97-103; 松浦 (2018), 92-110; 高橋 (2019), 47-50 参照。
- (9) 『バイドン』100b-d。少なくとも『アルメニデス』のこの箇所では、中期イデア論が後期対話篇で保持／放棄されているかは話題になっておらず、イデアそれ自体の本質把握、存在証明が問題になっている。
- (10) 思考それ自体を「対話」とみなす『テアイテトス』189e-190a、『ソフィスト』264a-b 参照。
- (11) T1 で「常に」と訳した αἰ (135c1) はイデアの自己同一性の「永遠性」を指すとも、イデアを探究するその都度の「毎回性」を指すとも解されう。
- (12) 「対話の力 τὸ δύναμις εἶδαι δύνανται」という表現は、プラトン対話篇では他に『ポリテイヤ』第六卷(511b3)、第七

- 卷 (532d8, 533a7, 537d5) と『カノボス』57e7 に認められるが、Gill (1996), 51-52 n.82 は『ポリテュー』第六巻 509d-511e や『ソフィスト』253b-e とは異なる仕方の特徴づけられたディアレクティケーとみなし、第二部の訓練がその例であると考へてゐる。
- (13) *roûrov* (135c6) の訳は、Gill (1996), 138: “these difficulties”; Brisson (2011), 110: “ces questions”; Scolnicov (2003), 74: “these issues”; Cornford (1939), 102: “the answers to these questions”に賛成し、Allen (1997), 15: “these things”; Hermann (2010), 99: “these things” (ヘプタ) には従わない。
- (14) テキストには定義活動の対象として、三つに加えて「諸形相のそれぞれ一つずつ *év êkúrov tów eidów*」(135c9-d1) とあり、プラトン対話篇で議論されているその他のアイデアを含めてよいが、これら三つが特別の意味をもつことは疑い得ない。
- (15) 「その点「第一の条件」に加えて、次のこと「第二の条件」もなきねばならぬ」(135e8-9) は明確に条件が二つあることを示している。二つの条件については Chemiss (1932), 129; Cornford (1939), 105-106 参照。
- (16) (1) (C) (D) の⑤〜⑧は(1)の構造と平行関係にあると仮定して整理した。
- (17) *oúk éiás* (135e1) との対比で意味上 *ékéleues* の含みをもたせむ。Cf. LSI (1996), 466: *éiós*, 1. 2.
- (18) Miller (1986), 202-203 n.53, Guthrie (1978), 52 n.2 は①の支持者として Cornford の他に Taylor, Runniman を挙げ、その解釈を批判し、②を主張している。
- (19) Miller (1986), 202-203 n.53 は別のレベルの問題として、第二部で感覚対象が実際に議論されている点を指摘しているが、これについては本節「四」注(29)参照。
- (20) *καὶ τὸ ἀγαθόν* (130a7), *ἐργασίαι* (131b1) と *ἡγάθη* (135e1) の呼応にも注意。
- (21) この一文については、通常の訳(例えば田中(1975), 12: 「この問題に関連するあなた「ゼノン」のお仕事もたいくんだ大胆な試みだと考えます」)には従わない。*τετραγυμνασθεῖσθε* (129e4) は中動相で、その意味上の主語は(本来明示されるべき)「ゼノン」(受動相でも動作主として明示されるべき)ではなく、文全体の主語と同じ「ソクラテス」であり、彼のこれまでのアイデアをめぐる探究活動 (cf. *εἰς ἃ νόησιν ἐκείνοισιν εἶδη ἐξενν, περὶ ἐκείνου τετραγυμνασθεῖσθε* 130d8-9) を意味すると解する(類似した文として『クラテュロス』421c1-2 参照)。ディアレクティケーの試みはまた *τετραγυμνασθεῖσθε* とも呼ばれてゐる (136c6)。*τετραγυμνασθεῖσθε* を中動相にするのは Cornford (1939), 70; Allen (1997), 7; Scolnicov (2003), 50; Hermann (2010), 83² 受動相にするのは Gill (1996), 130²。
- (22) *τὸ πλάγη* の使用は史的パルメニデスの詩を想起させる

- 効果があるかもしれなく (*ḗdaktōn* DK B6.5: *ḗdaktōn* *vōon* 6.6: *ḗdaktōn* 8.28; *ḗdaktōn* 8.54) 『ソフィスト』245e5 も参照。136e2 の *ḗdaktōn* に同じ注 (70) を見よ。
- (23) Miller (1986), 228 n.13.
- (24) Cf. Cornford (1939), 104 “discourse”; Allen (1997), 15: “rational account”; Scolnicov (2003), 75, McCabe (1996), 17: “argument.” 田中 (1975), 31 は「言論 (論理)」と訳す。
- (25) Cf. Gill & Ryan (1996), 139: “reason”; Brisson (2011), 111: “raison.”
- (26) LSI (1996), 1056 は *λογισμός* を I-1 counting, calculation, I-2 account, reckoning, II-1 (without reference to number) calculation, reasoning, II-2 reason, argument, III reasoning power の順で説明する。 *λογισμός*: *λογιστής* (『テイマイオス』348b1)。
- (27) Kahn (2013), 144-147 は『ソフィスト』の考察により *genos* と *eidōs* がダイアレクティクの対象であると解釈している。
- (28) 管見する限り McCabe (1996), 17, 19 のみが、当該箇所を「議論による把握がある場合に、アイデアが存在すると考える」と解し *εἶναι* を「存在」とみなす。
- (29) Gill (1996), 52-53, 53 n. 85-86.
- (30) Gill (1996), 52: “Socrates challenged him [Zeno] to display the same difficulty in the case of things that are grasped by reasoning, which he called forms.” と同じ注 (74) のパラフレーズ参照。

- (31) 同様の指摘を二〇一八年三月に福岡市で開かれた会合の席で荻原氏から受けた。 McCabe (1996), 16-21 も、第一部がソクラテスの存在論的コミットメントがはっきりしているのに対して、抽象的思考実験が繰り広げられる第二部は存在論的コミットメントから自由だと論ずる。
- (32) パルメニデスに存在論的コミットメントをさせない工夫という解釈も賞賛の文脈に反するよう思われる。第二部で「一」が感覚可能なものと取り扱われている事実を理解しやすくする工夫だが、これについて注 (59) 参照。
- (33) Kahn (2013) は三度 (2, 20, 32) この箇所の重要性を指摘するが、「余剰」的表現の哲学的意味を解説していない。
- (34) その意味でこの箇所の *εἶναι* は identity と同じより identification を表すと言える (cf. Allen [1971], 170-171)。類似した「思考」形態が『メノン』(77d7-e1) で問題になっていると解釈した、栗原 (2013) 第四章を参照。
- (35) *καὶ* の exegetical な用法に同じは Smyth (1984), 650, §2869a 参照。
- (36) 上記注 (10) 参照。
- (37) 田坂 (2007), 104 注が『テアイテトス』第一部「最後の反駁」(184b-187a) の解釈の中で打ち出した「対象把握」の理解を参照されたい。『テアイテトス』が「パルメニデス」を受けて執筆されたことを前提として、田坂の研究も踏まえてさらに *tū kovivá* (185c1) の存在身分の考察が必要

- になる。また、自己内対話による対象把握を例示する『ソ
ンボス』38b12-e8 については、栗原(2013)、234-237 参照。
- (38) 第一部でイデアの離在と超越の理解の仕方が批判的にな
っているのは言うまでもない。「超越」の意味について
は、松永(1993) 第五章「納富(2015)」を参照すべきであ
る。
- (39) Allen(1997)、99、y Gill(1996)、18 は狭く 129d-130a を
“Socrates’ Challenge”と呼ぶが、ソクラテスはゼノンとパルメ
ニデスをセットで考えようとする(128d4-b6; *diplōter* 130a1) の
で、ゼノン批判を含めて「挑戦」とみなす。
- (40) プロク羅斯(Cousin 694)によれば、ゼノンの本は四〇
の議論(*doxai*)からなる。シンプリキオスは議論がいずれ
も多があることを語る者に反対のことを語ることが帰結す
ることを導き、多がないことを論ずるとし(DK B2)、その
主題として大／小(B2)、限／無限(B3)に言及する。な
お『パイドロス』261d は似／不似、一／多、静／動に言及
する。Cf. Allen(1997)、79。
- (41) Cf. Comford(1939)、70。特に『パイドン』篇のイデア論
である(cf. Scolnicov [2003]、48)。
- (42) 中畑(2018)、3-35 参照。特に、感覚事物の関係性(条件
的性格)については17-20 をイデアの基準・尺度としての
役割(規範性)については27-32 を参照。「ある」の二用法
については、Kahn(2013)、6、8-13 参照。
- (43) *ōv* (129d6, BT 写本)の先行詞は田中(1975)、12 や
Hermann(2010)、60、83 と共に「石や木材などそのような(感
覚)事物」(cf. d3-4)とみなし、*zōōnōs* の目的語と解する。
Allen(1997)、7 は先行詞を「形相」とする。Gill(1996)、130
は「感覚事物」だが、属格を「くの形相」と *ta eīōn* に掛け
る。こうした読解は、第一段階の *ōmōnōn* (cf. *diplōter* 130b2)
と第二段階の *ōmōnōnōn* の区別を曖昧にする。
- (44) Allen(1997)、101 と共に *ōv ēnōnōnōnōnōn* (129c3) は「相
反するイデアはそれら自身の内で」となる(*pace* Comford
[1939]、70 n.1)。例えば、Comford(1939)、71 のように、『ソ
フィスト』251c ff. と同じ仕方で様々なイデアの結合が問題
化されているとは考えない。だからといって、相反するイ
デアの考察の際に、他のイデアとの関係が議論されないわ
けではない。
- (45) 第一節「三」で見たように、パルメニデスが訓練の対
象として〈多〉〈二〉に次いで〈似〉〈不似〉、〈動〉〈静〉、
〈生成〉〈消滅〉、〈ある〉〈ない〉を列挙するのも、T
6 の後半で主題化された反対のイデアの関係を考察するこ
とを通じて「ソクラテスの挑戦」へ応えることを意図して
である。他方、T 6 の前半の感覚事物とイデアの関係につ
いては、パルメニデスは第一部のイデア論批判で応答して
いると言える。
- (46) この語の使用は『パルメニデス』では以上の九回だけで

他にない。TLGによれば、プラトン全著作中(偽作も含む)で一二回使用されているが、能動形はその内六回である。この箇所ほど集中的な使用はないという事実は、(3)での「証示」が特別の哲学的意味を担われていることを推測させる。因みに、LSJ(1996)、225に意味は、*I show forth, display; II. I. make known, declare; 2-a. show by reasoning, prove c. part; b. represent, proclaim; 3. c. acc. et inf. make plain that...* (以下略)とあるが、この箇所の *ἀποφατικῶν* は分詞を取る省略を含めて(用法である)ことから、基本的に II. 2-a. を意味するだろう。

- (47) ① *ἀποδείξει* (12967) : 感覺事物が分有により一にして多であること(多)の証示と対比して(二)のイデアが多であること(多)のイデアが一であること(一)の論証を並べているため、証示の言い換え。② *ἀποδείξει* (12964) : 「私」が一にして多であること(多)の論証の部分として多であること(多)の証示(と一であること(一)の証示)、両方が真であること(二)の証示が語られる。③ *ἀποδεικνύωμι* (12944) : 同じ感覺物が多にして一であること(多)の証示の言い換え。④ *ἐπιδείξει* (130a2) : 形相が反対性質を許容すること(多)の証明は証示の言い換え。
- (48) Cf. Cornford (1939), 78-80.

(49) 「凌駕する」が「大きく」を説明する側であることは既に『バイドン』96c3-4で同意されている。イデア論では、T 8にあるように、個別的关系である「バイドンの内在形相

「大₁」√シミアスの内在形相「小₁」と「シミアスの内在形相「大₂」√ソクラテスの内在形相「小₂」が成立しているとき、「大₁」と「大₂」(そして「小₁」と「小₂」)は異なるが、二つの関係性「√」を成立させている自己同一なる「大」のイデアが、個別性から離れて「大₁」「大₂」とは別に自体的に存在する。

- (50) やはり言えば、T 7の例は作者から読者に対する証示にもなっている。

(51) こうした異様な表現については、プラトン著作群では他に *οὐτὰρ ταῖα* (『バイドン』74c1) がある。この表現については栗原(2013)、131-147で二種類の「現われ」経験(感覺判断と学習)に注目して主題的に論じた。

- (52) Cornford (1939), 70: "Things defined as just simply 'alike, 'one', etc., and nothing else." Cornford は同じ身分でみなす『バイドン』74c1 の *οὐτὰρ ταῖα* については、"quantities of which nothing is asserted except that they are simply 'equal'" (71, cf. 75) と説明する。それ以上の説明はないが、例えば、眼前のリンゴの三個とミカンの三個は「等しい」が、その「等しい」は数が等しいリンゴでもミカンでもないし、「等しさ」のイデアでもない、といったことだろう。

(53) 単に *τα πολλα* (12967, d5) とのみ表現される「多」のイデアについても、厳密には *οὐτὰρ τα πολλα* と複数表現となるはずだが、対話者はこの点に無頓着である。Cf. Allen (1997),

- 89 n.14.
- (54) 「挑戦」における個物の証示とアイデアの証示の対比の意識は *μᾶν … δέ … (129b1, 3; c2, 4) καὶ οὐ … ὀλίγα … (b4, 5, 6; d5, 6)* の構文により明白である。
- (55) この点がアイデア論の新たな課題となることは 130d^e で示唆される。
- (56) 1) の作業は T 6 の第一段階である *εἶναι δὲ τῆς ὄντων ἰσότητος ἐξ ἑκείνων ἰσοτότων μᾶν διαμῆνται χωρὶς αὐτὰ καθ' αὐτὰ τὰ εἶδη (129d6-8)* と合致する。
- (57) Sedley (2007), 82-84 は複数形を理由を、『パイドン』の〈等〉を考察する中で、〈似〉が「複数のものが互いに似ていることが何であるか」を意味することに見出している。なお『パイドン』の *αὐτὰ τὰ ἴσα (74c1)* の複数形を感覚事物からアイデアへと注意を向け変えることで説明する試みは Owen (1986), 230-231 (初出は一九六八年) まで遡り、最近では Tiozzo (2018), 13-14 に見られるが、〈等〉の現われが端的な学び(＝知識の習得)である点は気づかれていない(栗原(2013) 第5章・補論参照)。他方『パルメニデス』の場合は、証示の文脈である点が重要である。
- (58) 個人の場合は、思考の対話性を前提とする。注(10)、(36) 参照。
- (59) こう解釈すると、第一部の考察対象の中に感覚事物が含まれているようにみえる——Gill (1996), 53 n.86 に従えば
- 145b^e, 151e-155c, 155d——理由も、感覚経験を構成するアイデアがロゴスの対象として議論されているという仕方でも明々である。Kahn (2013), 20 は〈一〉が感覚の対象である可能性(155d6)について、それでも決して色やにおいなどの感覚性質や温冷湿乾などの質を問題にしておらず、自然世界の時空存在のための概念枠組を提供している点でロゴスの対象とみなしている。Miller (1986), 202-203 n.53 参照。
- (60) 高橋(2019), 63-66 は『パイドロス』276a の「魂の中に書き込まれる言葉」を、アイデアを代表する「理」としての言葉」とし、「探求においてわれわれが出合うのは代理だけである」から、ただ「ある」だけのアイデアを代理し、語る言語が「問答法」を通じて「吟味」されなければならない、と述べて、『パルメニデス』第一部をその実践とみながら述べている。
- (61) その意味で第二部の考察に抽象化 (abstraction) による抽象的思考実験の要素を読み取る McCabe (1996), 19-20 や Kahn (2013), 27-30, 32 を評価したいが、McCabe の見解に反し、感覚と思考のロゴスの連関を見て取る本稿の読解は、無論、存在論的コミットメントから自由ではない。
- (62) 個別具体的な状況のうちに存在する内在形相ですら、状況が変化して反対の形相が迫ってくると、その場を譲り渡して立ち去ってしまうか、そこで減ってしまうかする(『パイドン』102d-103a)。ましていわんやアイデアの場合、反対

のアイデアが結びつくことがあるわけがない、という推理である。この箇所については、栗原 (2015), 144-145 参照。また『パイドン』103a-e に挿入された反対性をめぐる印象的な対話を参照。

- (63) *ὑπερέχων / ὑπερέχουσαι* による〈大〉〈小〉の定義については、『パルメニデス』150c-e 参照。また〈大〉〈小〉と同じ扱いを受ける〈等しき〉については、『パイドン』で知識の所有が認められている (*ἐπιστάμεθα αὐτὸ ὅ ἐστιν* [sc. *ἰσὺν*] 74b2)。栗原 (2013), 111-129 参照。『ポリテイア』の「三本の指」の大小比較 (523c-524d) も参照。〈大〉〈小〉〈等〉については、意見の対立が生じても、それによって測れば対立が解消される、共通の尺度の把握が存在しているのである。『エウテュプロン』7b-d 参照。

- (64) 『パルメニデス』での〈似〉〈不似〉の説明については、139e-140b, 147c-148d 参照。そのうち①「〈同〉を蒙ったものは(似) *τὸ τούτων … περὶ φύς οἰονοῖν* (139e8, cf. 148a3)」「〈異〉を蒙ったものは〈不似) *τὸ … ἔτινον περὶ φύς … ἀνοῖονοῖν* (140a7-8)」、②「〈似〉と〈不似〉は反対 *τὸ … οἰονοῖν τῷ ἀνοῖονοῖα ἐναντιοῖν* (148a6-7)」「〈同〉と〈異〉は反対 *τὸ ἔτινον τῷ τούτῳ* [sc. *ἐναντιοῖν*] (a7) したがって③〈似〉の定義として「〈同〉を蒙ったもの」「〈不似〉の定義として「〈異〉を蒙ったもの」が考えられているようにみえる。しかし〈同〉〈異〉の定義が不明なら、〈似〉と〈不似〉

の本性が判明したとは決して言えないし、また、作用を蒙ること (*παύειν*) と作用を及ぼすこと (*ποιεῖν*) が反対である限り、作用を及ぼすことに注目することによって〈同〉と〈異〉を〈似〉と〈不似〉で定義すること——〈同〉は〈似〉に作用を及ぼすもの、〈異〉は〈不似〉に作用を及ぼすもの——も可能であり、その場合は一種の循環定義となつて論理的にはどれが基本的かを決定できないだろう。後期プラトンにとつて〈似〉〈不似〉は根本的な問題として残っていると思われる。

- (65) 〈一〉と〈多〉の関係をめぐる不知については『ソフィスト』251a-c、『ユンボス』14c-e 参照。Cf. Cornford (1939), 72-74.

- (66) 哲学の始まりとしての「驚き」については、『テアイテトス』155d2-4、アリストテレス『形而上学』982b12-13 参照。「挑戦」中の「驚き」関連の表現として *τέρας* 129b2, *ἄτρονον* b4; *θαυμάσειοναι* c1; *θαυμάζειν* c3; *θαυμάστων* c4, d5; *ἐθαύμαζε* … *θαυμάσας* e3; *ἐθαυμάσειν* e5 がある。この箇所の「驚き」の意義については、Scolimov (2003), 51 参照。

- (67) 例えば、『ソクラテスの弁明』22e, 29b、『饗宴』204a、『ソフィスト』229b-230a 参照。

- (68) ソクラテスをこう断罪してしまうのも酷かもしれない。彼は自らの至らなさに何らか気づきながら、自己自身と向き合うことを逃避しているようだからである (cf. 130d5-9)。

- (69) Hermann (2010), 83 n.16 は「分離」を第二部の第一、四、六、八議論、「混合」を第二、三、五、七議論に割り振っている。
- (70) 田中(1975), 157(ナリ)の *νάκη* をパラドクスを意味する 135e2 の *νάκη* と対比させ、「自由な遍歴」あるいは彷徨などの「よい意味」であるが、第二部で主題となる(一)〈多〉等のパラドクスとその解明を意味する点で基本的に違はないと思われる。重要なのは、その探究が訓練として「すべてを通して」網羅的に行われ、「偏食」になっていないことである。
- (71) 『ソフィスト』216c6-7: *οἱ μὴ νάστρες ἀλλ' ὄντως φιλόσοφοι, καθορῶντες ὑπόθευ τῶν κίρω βίωυ*; 243a7-8: *λίαν τῶν πολλῶν ἡδὼν ὑπερῶδόντες ἀλυφίονσαν* 参考。後者との結び付きは納富信留氏から教えられた。
- (72) 初期・中期対話篇のソクラテスを哲学探究の「生みの親」とするならば、である。
- (73) 『ポリテイア』との関係や登場人物ソクラテスとプラカデマイアの若者との関係など、『パルメニデス』の執筆意図をめぐる示唆に富んだ考察として Miller (1986), 18-25, 65-67 参照。

参考文献

Allen, R. E. (1971), "Participation and Predication in Plato's Middle

- Dialogues," in Vlastos, G. (ed.), *Plato I*, Garden City: Anchor Books: 167-183.
- (1997), *Plato's Parmenides*, 2nd ed., New Haven & London: Yale University Press.
- Brisson, Luc (2011), *Platon: Parménide*, rev. ed., Paris: Flammarion.
- Chemis, Harold (1932), "Parmenides and the *Parmenides* of Plato," *American Journal of Philology* 53: 122-38.
- Cornford, F. M. (1939), *Plato and Parmenides*, London: Routledge and Kegan Paul.
- Gill, M. L. and Ryan, Paul (1996), *Plato: Parmenides*, Indianapolis / Cambridge: Hackett.
- Guthrie, W.K.C. (1978), *A History of Greek Philosophy*, Vol. V, Cambridge: Cambridge University Press.
- Hermann, Arnold (2010), *Plato's Parmenides*, Las Vegas: Parmenides.
- Liddell, H. G. & Scott, R. (1996), *Greek-English Lexicon*, Oxford: Oxford University Press.
- McCabe, M.M. (1996), "Unity in the *Parmenides*: The Unity of the *Parmenides*," in C. Gill & M.M. McCabe (eds.), *Form and Argument in Late Plato*, Oxford: Oxford University Press: 5-47.
- Meinwald, C. C. (1991), *Plato's Parmenides*, Oxford: Oxford UP.
- Miller, Mitchell, Jr. (1986), *Plato's Parmenides*, Princeton: Princeton University Press.

- Owen, G. E. L. (1986), *Logic, Science and Dialectic*, Ithaca: Cornell University Press.
- Scolnicov, Samuel (2003), *Plato's Parmenides*, Berkeley & Los Angeles: University of California Press.
- Sedley, David (2007), "Equal Sticks and Stones," in Dominic Scott (ed.), *Mateusis*, Oxford: Oxford UP: 68-86.
- Smyth, H. W. (1984), *Greek Grammar*, Cambridge Mass.: Harvard University Press.
- Tuozzo, T. M. (2018), "'Appearing Equal' at Phaedo 74B4-C6: An Epistemic Interpretation," *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 54: 1-26.
- 栗原裕次 (2013) 『イデアと幸福——プラトンを学ぶ——』知泉書館
- (2015) 「プラトン・イデア論のダイナミズム」、土橋茂樹他 (編) 『内在と超越の関』知泉書館: 135-151
- 高橋久一郎 (2019) 「代表するイデア、代理されるイデア」『千葉大学 人文研究』48: 35-139
- 田坂さつき (2007) 『デアイテトス研究——対象認知における「*ἡμεῖς*」と「*σίνης*」の構造——』知泉書館
- 田中美知太郎 (1975) 『プラトン全集4』岩波書店
- 中畑正志 (2018) 「イデア論はどのように成立したか」『METHODOS 古代哲学研究』50: 3-35
- 納富信留 (2015) 「イデアの超越——魂の変容と現実の開示——」

『思想』1097: 41-49

早瀬篤 (2019) 「発展主義解釈と新統一主義解釈——プラトンの研究の最近の動向から——」『METHODOS 古代哲学研究』51: 18-40

藤澤令夫 (2014) 『プラトンの認識論とユスモロジー』岩波書店

松浦明宏 (2018) 『プラトン後期的デアアレクテイケー——イデアの一性と多性について——』見洋書房

松永雄一 (1993) 『知と不知——プラトン哲学研究序説——』東京大学出版会

「本稿は科学研究費基盤研究 (C) 「善・美・正義の倫理的説明を目指す後期プラトン哲学の存在論・認識論的探究」 (課題番号 19K00011) による成果の一部である。」